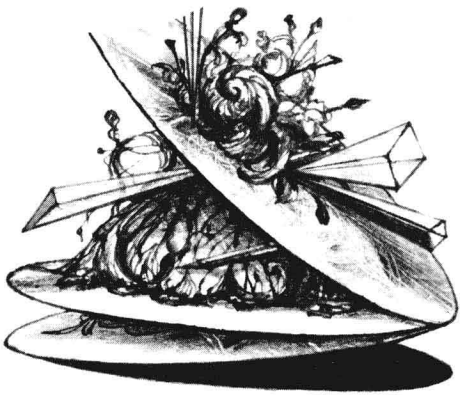
虚航船団

筒井康隆



新潮社版

虚航船団（きょこうせんだん）

●著者　筒井康隆（つついやすたか）　●発行者　佐藤亮一
●印刷所　二光印刷株式会社　●製本所　加藤製本株式会社　●発行所　株式会社新潮社
〒162　東京都新宿区矢来町71　振替　東京4-808
電話　業務部(03)266-5111　編集部(03)266-5411
●1984年5月10日印刷　●1984年5月15日発行
定価1900円

© Yasutaka Tsutsui　Printed in Japan, 1984
乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-600639-1 C0393

虚航船団　目次

第一章　文房具……5
第二章　鰓族十種……145
第三章　神話……301

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

虚航船団

第一章　文房具

まずコンパスが登場する。彼は気がくるっていた。針のつけ根がゆるんでいたので完全な円は描けなかったが自分ではそれを完全な円だと信じこんでいた。彼は両脚を屈伸できる中コンパスである。しかし彼が実際に両脚を屈伸させる場合は極めて少い。いつも脚を伸ばしたままだ。その為には大コンパスがいるではないかというのが彼の理屈だったのだろう。その理屈を誰かが聞いたわけではないにかかわらず誰もがコンパスのその理屈を悟っていた。何が悲しくて自分がそのように猥褻とも言える恰好をしなくてはならないのかとコンパスは思っているのであろうと皆が信じていた。なぜかというとそもそもそんな必要はまったくないにかかわらずそのまったくない必要以上に彼は自分をスマートに見せかける努力を怠らなかったからだ。そのスマートに見せかけようとする行動の硬直性は彼の動作をかえって泥くさく見せた。スマートさに一部崩れた態度と身装(みな)りが必要だということをあきらかにコンパスは知らなかった。さらにまた、そもそもなぜそのように見せかけるのかといえば彼は宇宙船の乗組員全員から自分が差別されているのではないかと常に疑っていたからだ。というのは乗組員の中には彼のことをあれは文房具ではなく製

図用具ではないかと言う者がいたし他のある者に到っては観測器具だろうなどとも言い、そうした言葉の端ばしは船橋などに立っている際自身のことについては限りなく敏感なコンパスの耳にしばしば入ってきたからである。むろんそうした言葉は他の乗組員たちの至極素朴な疑問に過ぎず何らコンパスを自分たち文房具階級の最下位またはそれより下に貶めようとするものではなかったのだ。むしろ文房具たちの階級感覚ではたとえ実際にはそのような階級制度などが存在しないにもかかわらず、そしてそのことがわかっていてさえ製図用具は彼らより上の階級に属していると思える筈だった。ある種の製図用具はステイタス・シンボルにさえなり得たではないか。それにまたコンパスを製図用具というなら彼以上に製図用具たるべく運命づけられたディバイダーや烏口コンパスや比例コンパスだって同じ船に乗船していたししかも彼らのうちのディバイダーと、コンパスは同じ船室で寝起きする仲間である。だがこれは誰にでも容易に想像できることながら彼は当然ディバイダーが嫌いであった。そもそもコンパスとディバイダーが同じ船室に寝起きし続けていることが誰の眼からも不思議に見えた。まずディバイダーは彼の下段の寝棚で常に驚異的な鼾を立てた。鼻中隔彎曲症もしくは肥厚性鼻炎による大鼾であろうとコンパスには思えたが横臥して寝れば鼾が比較的小さくなることを彼がいくら教えてやってもディバイダーはすぐに仰臥して破壊的な大鼾を立てるのだ。もちろんそんなことは些細な一例である。しかしその些細な例の積み重なりはコンパスの気を狂わせずにはおかなかった筈と誰もが確信していた。もしかするとそれに耐えていることこそコンパスがすでに狂っている証拠ではなかっただろうか。他にも乗組員の中でコンパスに似た姿の者としてはピンセットがいる。驚くべきことにはかけている眼鏡までが同じだったのだ。だがこれはコンパス自身もピンセットもまた他の連中も二人をまったく似て非なる者として認めていたので問題はなかったし眼鏡にしても姿が似ているからこそ同じ眼鏡がいちばんよく似合うというので両者同じ眼鏡を選んでかけているだけなのであろうと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

納得できるのだ。コンパスが観測器具ではないかと言った者はコンパスがたまたま観測室勤務だったから連想が短絡したのでありしかもコンパスは決して彼が観測器具だからというので観測要員に任命されたわけではない。その証拠に観測室には用途的に本来観測とはなんの関係もないセロテープなどという者もいる。さらにもしコンパスに言わせるならば当然あのピンセットがなぜ自分たちの船に乗組んでいるのかその方がよほど奇妙ではないか彼は文房具ではなく医療器具であり強いて言えばせいぜいが理科実験教材ではないかと言った筈である。ところが単なる文房具であると自己主張するそのコンパスが観測要員として有能ではなかったかといえば決してそんなことはなかったのだ。コンパスの観測室における勤務ぶり仕事ぶりは真面目であり正確であり便所に立つ回数が多いことを除けば迅速でもあり、つまりそれはコンパスの狂気を知る者に充分疑問を抱かせ得るほどのものだった。なぜ彼が勤務中に便所へ立つ回数が多いのかという疑問及び彼が船内の便所で用を足そうとする時の一種の儀式めいた珍妙な仕草は船内の話題になっているほどだがこれはのちに詳しく述べる機会があるだろう。

コンパスはしばしば他の乗組員に自分をどう思うかと訊ねて曖昧な返事を許さなかった。自分はもしかすると非常にいやらしいのではないか。自分のことを他の者はあなたにどう言っているか。それをあなたはどう思うか。こういう質問をすることをあなたはどう感じるか。いやらしいのではないか。自分の喋りかたをどう思うか。まともであるとすればそのまともさの基準は何か。最後には必ず口喧嘩になったがそれは相手が彼のことを悪く言ったためではなく彼の追及のしつこさに相手が腹を立てるためであった。相手が自分より口達者であった場合には喧嘩ののち彼は宇宙標準時間にして約四十分間をひとりさめざめと泣き続けるのだ。その泣きかたは自分をスマートに見せかけようとするいつもの態度をまるっきり抛棄し、いやむしろすすんでかなぐり捨てただ泣くことにのみしがみついているかのような泣きかただった。コンパスは泣く時に限ってあ

きらかに自分の理想我を忘れ去っていた。それはまるで泣くのを楽しんでいるかに見える泣きかただったので彼の泣く姿を見た者は常になんとなくいやらしさを感じた。しかしコンパスにしてみれば自分の硬直した態度を抛(なげう)っていられるその泣いている時こそが彼の唯一の息抜きの時間だったのかもしれない。

船団が基地を発進して以来大学ノートが死ぬまでの期間ではあったがコンパスはしばしば大学ノートにも前記の質問及びそれらに附随するさまざまな質問をした。修理班に属していた几帳面な大学ノートは他の連中のようにはぐらかしたりすることはなくいつも彼の質問に真面目に答えようとした。したがってある一時期コンパスが質問する相手は大学ノートひとりに限られていた。他の者は大学ノートが特に心優しいからであろうと思っていたが実は大学ノートは物ごとを秩序正しく整理するのが好きでありそしてそれは自分の頭の中の雑多な思考を扱う際にも同じだったのだ。だからもし自分がコンパスの質問に答えられないとすればそれは自分の思考が論理性に欠けているためだと判断し自分の思考さえコントロールできない自己の雑思考整理能力を責め続けたのだった。大学ノートは次第に痩せ細って行きやがて元来蒼白かった顔色が黝くすみはじめてついにある日死んでしまった。紙の楮先生の報告書によれば死因は骨髄細網細胞症であったとも仮性狭心症であったとも迷走神経性肺炎であったとも診断されている。船内では乗組員全員が左舷船橋に集って大学ノートのため簡素な告別式をしてやることになり、ちょうど墨汁が伝玄という僧侶だったので仏式で挙式された。伝玄墨汁の読経が続く中を乗組員たちが順に席を立って焼香しはじめた。コンパスは式が始まった時からうしろの席でさめざめと泣いていたのだが自分の名を呼ばれて焼香に立った時からその嗚咽は号泣となった。涙で前方が見えなくなったため彼は祭壇へ進みながら眼鏡をはずし服の袖で眼を横に拭った。眼を拭いながら歩いたものだから祭壇につまずいていったんどたと前に倒れ、すぐ立ちあがり、泣き続けながら焼香を終えた彼は祭

壇をおりる際にころげ落ちてまた倒れた。今度は船橋いっぱいに響きわたるような破裂音に近い大きな音がしたのでうしろの席の者は何ごとかと立ちあがり最前列の者も驚愕で思わず立ちあがった。コンパスはすぐに自分で起きあがり席へ戻るために歩き出したがその間も号泣し続けた。このために故人とコンパスの間柄をよく知らぬ参列者の中にはまた新たに涙をさそわれる者もいたが他方ではふだんのコンパスの泣きかたが観衆の前で喜劇的行動を伴いつつ拡大されて演じられたおかしさと、このような気ちがいにとり憑かれて死んだ大学ノートの哀れさのためしのび笑いとしのび泣きを同時に洩らす者もいた。コンパスは大学ノートの死が自分に関係しているなどまったく思わなかったし他の乗組員の中で仮にそう思った者がいたとしても現実には誰もコンパスに対してそれを詰る者はいなかったからコンパスが自責の念を抱くこともなかった。なぜ誰も詰らなかったのかというともし詰ったりすればコンパスがふたたびそれに関する質問を例によって誰かれかまわずに際限なくくり返すだろうと想像できたからだし、そもそも大学ノートを死に到らしめたコンパスへの怒りを心に抱いた者はひとりもいなかったのだ。他の乗組員はおそらく他人の死やその原因にかかずりあっている暇はなくそれぞれが自分に関したさまざまなことを解決するだけで手一杯ではなかったかと思われる。さまざまなことといっても大多数の乗組員にとって最も重要な問題は自身の精神の問題及び自身の精神から発する強迫的な行為に関した諸問題であったろう。誰もが自分の精神のなしくずしの死による肉体の死のみに恐れを抱いていたのだ。

ここでナンバリングが登場する。彼は戦闘要員だった。乗組員のほとんどは戦闘の際戦闘要員になってしまうわけであるが彼は最初から戦闘要員たるべく任命されていたので時間をもてあましていた。その無為の時間は彼を強迫的な行為に陥れた。いつの頃からか彼は自分の行為のひとつひとつに番号を打たずにはいられなくなってしまっていた。最初の1という勘定をいつ行ったのかもう彼自身にもわからなかった。通常の人間であれば心の中で数をかぞえるがナンバリング

は数をかぞえること自体が行為になるのだ。一時他人の行為に対しても数をかぞえようかどうしようかと迷ったような記憶がナンバリングにはかすかに存在する。だが結局はその他人の行為に対して自分の示した反応のみをかぞえていくことに決定したのだ。つまり彼は何もかも自分の行為を中心にして数をかぞえていけばよかったのである。けじめがついて楽ではあったがそのかわり彼は自分の行為を見つめることにのみ熱中し、したがって自分の中に沈潜し、次第に他人の行為が眼に入らなくなった。時おり彼は自分のこれから行おうとしていることが番号を打つに価いするものかどうかわからなくなって硬直した。彼が硬直し動きのとれない状態に陥っているのを見ても戦闘状態でないことがはっきりしている平時においては誰もなんとも思わなかった。だからナンバリングは人知れず静かに狂っていった。にもかかわらず他の乗組員からナンバリングは考え深い男だと思われていた。沈思黙考するタイプの頼りになりそうな男だとも思われていた。一方では何を考えているかわからないので不気味だという者もいた。どちらにしろナンバリングが単に自分のすることをかぞえているだけの人間だなどとは誰ひとり思ってはいなかった。彼は八輪のナンバリングだったから少くとも9が横に八つ並ぶまでは自分の行為をかぞえ続けねばならない。もちろん0に戻ればまた1からかぞえることになるが彼がそれ以後もさらにかぞえ続ける気なのかどうか、または自分の行為ではなく他の何かをかぞえることにするつもりなのかどうか、それは彼自身にさえわからないことだ。数をかぞえはじめた最初の頃の約十カ月間ほどであった筈だがナンバリングには自分が歩くときその一歩一歩に番号を打つべきかどうか出発点から到達点までを1とすべきかどうかに悩んでいたような記憶もある。結局のところ無為をもてあまし船室から船室へと漂うように歩きまわっている場合は到達点などないのだからという理由で彼は次の如く一歩一歩番号をつけることに決定したのであろう。

03765110
03765111
03765112
03765113
03765114
03765115
03765116
03765117
03765118
03765119
03765120
03765121
03765122
03765123
03765124
03765125
03765126
03765127
03765128
03765129
03765130
03765131
03765132
03765133
03765134
03765135
03765136
03765137

ナンバリングは滅多に声を出して笑うことなどなかったが彼が右の如き番号を打ち続けた頃までに乗組員の中のある者たちは宇宙船が発進して以来彼が気ちがいじみた声で笑うところをたった三度だけ目撃している。それは彼の行為番号が00999999から01000000になった時と01999999が02000000になった時そして02999999から03000000になった時である。じつはそれ迄にもたとえば00099999が00100000になった時の如きひと桁下の繰りあがりの際彼は声を押し殺したくすくす笑いを合計九回しているのだがそれらの時には誰もそれに気がつかなかっただけのことである。またその数字がナンバリングに出会うたびに変化していることに気づいた者こそ少数ながらいたが彼らとてその数字が何を示しているか知っている者はなく、まして彼の笑いとその数字とを関係づけて考える者などひとりもいなかった。ナンバリングの笑いかたが次第にはげしくなるその度あいから予測すればいずれ09999999が10000000になった時彼がどれだけ野獣めいた爆笑をすることか、おそらく大勢の者が驚くのではないか、さらにまた

99999999が一瞬00000000となったあかつきにいかなる狂態を演じることかなど想像するだにおそろしく予断を許さぬものがありあるいはナンバリング自身の死ということさえ考えられるのだがあいにく乗組員たちはナンバリングがそのようなことで笑ったなど夢にも思っていないのだからそうしたことを予測したりおそろしがったりできる者も当然のことながらひとりもいなかったのである。ナンバリングは他の乗組員の眼にとまりやすい異常な行動を演じたわけではなかったし彼の行動は極めて日常的なものに限られていたからだ。ところがナンバリングは実のところ今では数をかぞえるためにのみ行為しているといってもいいほど精神が空洞化してしまっていた。たとえば彼が朝眼を醒ましてまず考えることはといえばせいぜい今日は数字がいくつふえるだろうかとか彼が想定したある数字にまで今日中に到達できるであろうかとかいったことだけだったのである。

戦闘要員とはいうものの彼にその他のなんの役割もあたえられていなかったわけではない。彼は船内保安班の一員でもあった。しかし保安班が集合したり出動したりするような騒ぎは何ひとつ持ちあがらなかった。持ちあがるほどの騒動はといえば誰かが異常な行動をとりはじめた時であったろうがたいていはその時その者のいちばん近くにいた保安班員がひとりかふたりで処理できるていのものであったし仮にもしそれ以上の大騒動になるほど精神に異常を来した者が発生したとするなら保安班の集合や出動を待つまでもなく乗組員のほとんどに狂気が伝染して収拾のつかぬ状態に陥ることは誰の眼にもあきらかだった。つまりこの宇宙船たるや保安班員であるとそれ以外の乗組員であるとを問わず、またそれが外見的にそれと判断できるものであるかないかを問わず一様に同じ程度に少しずつ狂気に蝕まれていたため辛うじて見せかけの正気の水準で平衡

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo